

よい取り組み

<p>隔離室に関すること</p>	<p>隔離室内に、精神医療審査会に退院請求や処遇改善請求ができることや、患者の人権に関する相談先の電話番号の掲示があった。</p> <p>A病棟の隔離室の窓の外にブラインドが設置され、開閉スイッチが室内にあり、患者が採光を調整できる。日差しはよく取り込める環境だった。</p>
<p>通信 面会について</p>	<p>北館の各病棟には、公衆電話が3台ずつあり、うち1台が受信専用となっていた。</p> <p>携帯電話利用についての誓約書を交わすと病棟内の使用エリア内で使用できる。</p> <p>公衆ボックスはスライド式の扉がついていて、車椅子で入るにも十分な広さがあった。電話機の前には、精神医療審査会等の他に大阪弁護士会ひまわりと大阪精神医療人権センターのパンフレットや電話番号が掲示されていた。それらの掲示物は、剥がされたりすることがないようにカバーがかけられていた。</p>
<p>プライバシー その他</p>	<p>A病棟の病室は4人部屋もベッド毎に壁で仕切られていて、個室のような造りでプライバシーの守られやすい造りであった。</p>
<p>療養環境</p>	<p>ベッドの間仕切りが、机と椅子に加え複数の引き出しとクローゼットが一つのセットになっており、障子のような部分もあり、高さはあったが圧迫感がなくきれいで非常に良かった。ベッド周りのカーテンもしっかりと設置されており、患者も自由に使用していた。</p> <p>掃除が行き届いており、患者からも「この病院は清潔だから良い」との声があった。</p> <p>病棟は、清潔が保たれており、掃除が隔々まで行き届いていた。</p> <p>患者から、「食事が美味しい」「食事が楽しみ」という声が多く聞かれた。</p> <p>人権センターのポスターが公衆電話の設置場所に掲示されていた。</p> <p>A病棟では、看護研究で病棟環境の工夫に取り組まれ、トイレの表示やデイルームの机の配置等、限られた空間や条件の中でも病棟環境が患者にとってよりよいものとなるよう、努力されていた。</p> <p>各病棟のデイルームに新聞や漫画等が置かれ、患者が自由に見ていた。</p>
<p>金銭管理</p>	<p>金銭の管理費が無料であること、貴重品ボックス、おこづかい使用書等の仕組みは安心できるものであった。</p>
<p>隔離 拘束</p>	<p>A病棟では、3年程前からフランスの認知症ケア技法「ユマニチュード」を取入れている。さらに、行動制限の開放観察について、医師から時間指定での指示を出してもらうのではなく、例えば「患者の機嫌が良い時や安定している時に開放観察をする」といった指示を出してもらい、看護師の判断で迅速に身体拘束を外して開放観察ができるようにしている。患者の状態がよければ、看護師から積極的に身体拘束を外せるように意見を出しているとのことだった。</p>

意見箱	意見箱に投函される意見は、看護部長と事務長が月2回収し、意見を分類して業務改善委員会と接遇委員会で検討することだった。業務改善委員会で扱えない設備等の問題は、管理職会議や経営会議に掛けられ、回答は月1回掲示される。訪問時は、全ての病棟でエレベーター付近に回答が分かりやすく掲示されていた。回答内容を精査し、再評価を半年に1回行うので、「検討します」等の回答をした際は、どのように検討し対応した等の内容を追加で掲示しているとのことだった。掲示されている回答から、患者が意見箱を気軽に使えているように感じた。
	A病棟の意見箱には、「気がねなく、みなさんのご意見ご要望を入れてください」と貼られていた。投書しやすくする配慮だと感じた。
	(1) 意見箱についての説明書きが、意見箱の側に掲示してあった。説明書きには意見箱に投書する際、患者が記名か匿名かと、投書への返事が必要か不要かを選択できること、返事が必要と選択した場合、患者に対してどのように回答するか等の説明が記載されていた。 (2) 意見箱への投書数が多く、直近の人権委員会で検討した投書数は250件だった。 (3) A病棟では、意思表示が難しい患者が多いため、家族が面会等で来院した際に、気になる点がないかを聞くようにしていた。
	意見箱への投書に対する回答は、内容を一般化して全ての意見箱のそばに掲示されていた。また、意見箱・意見箱への投書に対する回答・用紙とペンが同じ場所にあることで、意見箱活用の流れが分かりやすかった。
	意見箱の横には投書してからの流れと、よく入る投書の例とそれに対する回答が掲示されていた。

職員研修	身体拘束に関する医師の判断について、3段階のスーパービジョンが設けられ、システム化されていた。
------	---

その他	児童思春期の患者に対する支援が、個別に丁寧に行われていた。また、看護師も認知行動療法の専門知識を学んでいるとのことだった。
	訪問時、C・D病棟でOTが行われていた。5人程度の患者が、小さな輪でカラオケやテーブルで塗り絵などの作業をしていた。2病棟分(120名分)のデイルームのため、食事時には騒然とするのではないかと感じられる大きさではあったが、よい雰囲気で行われていた。
	摂食障害の治療が積極的に行われていた。
	患者から「PSWとは月に3回位は話ができる」「PSWが親身に相談に乗ってくれた」「PSWはよく話を聞いてくれる」という声が複数あった。
	平成30年から年に2回、広報誌を発刊し、ホームページにも掲載している。病院の特徴、病院内の様子、PSWの業務等が分かりやすく説明されていた。また、イラストが適度に配置され、手に取り、読みやすいものだと感じられた。編集は、病院内の各部署から職員が参加して8名で編集しているとのことだった。
	附属看護学校と近隣の看護学校から多くの実習生を受け入れている。職員によると、「実習生がいない日は、ほぼない。大変だけれど、新鮮な意見や感想も聞かれるので、良い刺激になっている」とのことだった。実習生の立場であるとしても、病院に外の目が常時入ることは、望ましいことだと感じた。
	療養病棟において、複数の患者が自分の担当PSWを認識していた
	殆どの病棟で、複数の患者から「困った時は担当の看護師に話すようにしている。話し掛けやすい」等の声が聞かれた。
平成29年8月から精神科リエゾンチームを発足していたが、認知症ケアチームと緩和ケアチームがあることも影響し、精神科リエゾンチームの職員が直接患者を支援するケースは、新規ケースでは月1名程度になっている。患者を直接支援するには至らずとも、チームが他科をラウンドする中で、他科の職員からの相談を吸上げられるようになってきている。個別の直接支援のみではなく、今後は、睡眠について等の心理教育的な活動等も行っていきたいとのことだった。	